

エルサレム攻囲戦（ユダヤ戦争等）

ユダヤ戦争（AD66年から73年まで、ローマ帝国とローマのユダヤ属州に住むユダヤ人との間の戦争で、ユダヤ属州総督のローマ人**フロルス**がエルサレムの第二神殿の宝物—17タラントの金：17×6000ドラクメ（1ドラクメ=1日の日当）/タラント≒1億円—を奪ったことに端を発している）の時、反ローマの暴動の中核をなしたのは、**熱心党**（Zealotry）と呼ばれる人たちであった。

ユダヤ属州総督**フロルス**は、暴動を鎮圧しようとするが、暴動の勢いは強く、フロルスは隣接するシリア属州のムキアヌス総督に援軍を派遣してもらうが、全く歯が立たなかった。

慌てたローマ帝国の第5代皇帝**ネロ**（在位：AD54～68）は、後に皇帝となる将軍**ティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス**（出生：AD9年11月17日～79年6月23日、在位：AD69～79）に大軍を与えてエルサレム攻略に向かわせた。

ウェスパシアヌスは名将で、エルサレムを直接攻撃するのではなく、周辺都市を陥落させることで、暴動を鎮圧しようと試みた。その時、ユダヤ軍の指揮官としてガリラヤを守っていたのが、後に「ユダヤ戦記」を記したユダヤ軍の指揮官**フラウィウス・ヨセフ**であった（後、ローマ軍に投降するが、その理由は、もともと熱心党のやり方に強い不満を抱いていたからとされている）。

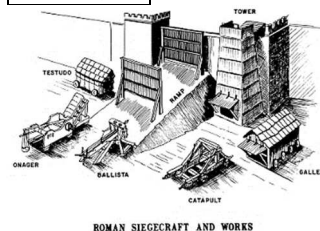
ウェスパシアヌスは、ユダヤ軍を撃破し、サマリヤやガリラヤを攻略、エルサレムを陥落した。

・・・・・・・・・・ローマでは皇帝ネロが・・・・・・・・・・

皇帝**ネロ**は、当初は師のストア（ヘレニズム哲学の一派で、BC3世紀初頭にキプロス島キティオンのゼノンによって始められた）哲学者**セネカ**の補佐もあって善政をしいたが、次第に狂気を発し、乱行が多くなっていく。AD64年7月、ローマの大火が起こり、ネロが新しい都市計画を思いついて火をつけたとの噂がたつと、それを打ち消すため、キリスト教徒を放火犯にし、大迫害を行い、陰謀の疑いとして師セネカを捕らえ死に至らしめた。最後の数年はローマを離れ、憧れだったギリシアに渡り、演劇や音楽に熱中するなど、完全に皇帝としての役割を無くし、元老院も廃位を決定、追いつめられたネロはAD68年に自殺した。後継ぎもいなかったため、皇帝継承がうまく行かず（→ローマ内乱）、最終的にユダヤ戦争を指揮していた**ウェスパシアヌス**を推す声が起こり、元老院は皇帝として**ウェスパシアヌス**を選任した。**ウェスパシアヌス**はエルサレム攻略を息子（長男）の**ティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス**（父と同名で一般には、**ティトゥス**と知られる、在位：79～81年）に任せてローマに入り、元老院の支持を得て、皇帝となった。

父の後を継いだ息子の**ティトゥス・フラウィウス・ウェスパシアヌス**は、巧妙な戦術に出た。第二神殿にきた巡礼者たちに、エルサレムへの入場を認めながらも、出ることを禁止したのである。当然、エルサレムの人口は増え、水や食料が不足した。その上で**フラウィウス・ヨセフ**を使者としてエルサレムに籠る熱心党を降伏させようとしたが、熱心党は降伏を拒否し続けた。そのため、**ティトゥス**は、兵糧攻めを続行し、一方で、攻城兵器を使用して、城内への侵入を行い、AD70年、エルサレムは陥落した。**ティトゥス**は、第二神殿の徹底的な破壊を命じた。頑迷で激しく抵抗するユダヤ人に対して、ローマ人は強い怒りを抱いていたので、ローマの兵士たちは喜んで破壊作業を行った。

ティトゥスは、「自分たちの神に見捨てられた民を征服しても、何も得るものはない」として、勝利の冠を受けるのを拒否した。



ROMAN SIEGECRAFT AND WORKS

エルサレム攻囲戦

AD70年にエルサレムを巡って起こった攻城戦で、ユダヤ属州のユダヤ人とローマ帝国の間に起こったユダヤ戦争（第一次ユダヤ戦争）の決戦になった。この戦いでローマ軍は、ユダヤ人の叛乱軍が66年以来立て籠もっていたエルサレムを陥落させ、市街のほか、聖地であるエルサレム神殿も破壊された。一部のユダヤ人はマサダ砦に逃れ、73年に玉砕するまで戦い続けた。

エルサレムの喪失で本拠地を失ったユダヤ民族は各地に離散した。神殿の崩壊した日は民族の悲劇の日とされ、今でもティシュアール・ベアープと呼ばれる悲しみの記念日とされている。



←**ティトウス**によるエルサレム破壊

ヴィルヘルム・フォン・カウルバッハ (Wilhelm von Kaulbach)
1846年。

ヘロデ大王が築いた巨大な第二神殿（エルサレム神殿）を
どうするかについては、（フラウィウス・ヨセフスによれば）
ティトウスには当初破壊する意思はなく、そのままローマ皇帝
やローマの諸神に捧げる神殿へと変更するつもりだった。しか
し神殿への火の勢いは留まることを知らず、神殿は完全に倒壊
した。この日は奇しくも、ソロモン王の建てた最初のエルサレム
神殿が破壊された**ティシュアール・ベニアーブの日**（タルムードに

起源を持つユダヤ教の祝祭日の一つで、ユダヤ教とユダヤ人の歴史の中で、最も悲しい日と位置づけられる、悲しみを記念する日）であった。このとき焼け残った神殿の壁の一部が、現代ユダヤ人にとって聖地とされる「嘆きの壁」である。火はさらに住宅地区へも燃え広がった。ローマ兵は市街地でのユダヤ人たちの抵抗を抑えていった。ユダヤ人たちのうち一部は秘密のトンネルで市内を脱出し、一部はさらに市街地の城壁で囲まれた一角に立て籠もった。エルサレム市をローマ軍が完全に制圧したのはAD70年9月7日のことであった。参考：ウィキペディア「[攻囲戦、エルサレムの破壊](#)」

ウエスパシアヌス帝（**ティトウス**の父）は、エルサレム陥落を記念した銀貨「**Judaea Capta**」（ユダヤ征服）を発行し、ローマには勝利を記念した**ティトウス**の凱旋門を造った。



エルサレムが陥落してもユダヤ民族の抵抗は続いた。

エルサレムの南、標高約400mの**マサダ山（マサダ砦）**がある（「マサダ」とはヘブライ語で「要塞」を意味し、現在は世界遺産—文化遺産となっている）。

BC120年頃、死海のほとりの砂漠にそびえる切り立った岩山の上に建設され、後にヘロデ大王が離宮として改修した。山頂へは「蛇の道」と呼ばれる細い登山道が一本あるのみ、周囲は切り立った崖で、難攻不落と言われた。ここに熱心党のリーダー、**エルアザル・ベン・ヤイル**に率いられた民族約1000人（老人、女性、子供もいた）が籠城した。ローマ軍も約15000の兵士を派遣、これを完全包囲したが、長期戦となった。援軍もなく孤立無援の中で最終的に、奴隷となるより死をと、籠城ユダヤ人の全員が集団自決した（ユダヤ戦記は穴に隠れていた2人の女と5人の子供だけが生きのびたと伝える）。マサダの陥落によってユダヤ戦争は終結し、マサダはローマ軍により徹底破壊され、長い間その所在が不明だったが、1838年にドイツ人考古学者によって所在が確認された。



→**エルアザル・ベン・ヤイルの最後の演説**（ユダヤ戦記）

「勇氣ある立派な戦士諸君、我々はかつてローマ人にも神以外の他いかなるものにも、奴隷として仕えないと決心した。というのも、神だけが人間たちの真実で正義の主人だからである。今、我々の決意を行動で証するよう命じる時がきた。それに対しては、我々は自らを辱めるようなことはすまい。・・・私は信じる。我々は自由の戦士として立派に死ぬるこの恵みを神から与えられているのであり、この恵みは予期せぬ敗北を喫した者たちには許されていないのだ、と。

明日の朝になれば、我々は間違いなく捕虜になる。しかし今我々には、最愛の者たちと一緒に高貴な死を選び取る自由がある。敵どもは我々を生きながらにして捕えようと躍起になっているが、今我々は戦っても彼らに勝利することができないように、彼らも我々の自決を阻止することはできない。」